

## 程よい距離

柴田佳美

景と情を、一首のなかで組み合わせさせて詠むことがある。景と情が程よい距離を保っているか否かが、作品の良し悪しを大きく左右すると言われる。

高野公彦著『歌の魅力の源泉を汲む―わが意中の歌人たち―』（校書房）の中の、「火も人も時間を抱く―佐佐木幸綱の歌―」から作品を引いて考えたい。

春の雲くぐもる地平、若き日は歌を衍と  
など思いいけん

佐佐木幸綱『金色の獅子』

「上二句は眼に映る景を言ひ、下三句は自分の心を述べてゐる」と、高野公彦が示すように、遙かな春の「景」に、歌への思いの「情」が組み合わさる。

素麺に胡瓜の車輪 夏過ぎてわずかなれ  
ども子の背丈伸ぶ 『瀧の時間』

素麺にあしらった胡瓜の断面が車輪のように見える、という食卓の景がいきいきと描かれる。「夏過ぎてわずかなれども子の背丈伸ぶ」と響きあい、豊かな情緒が伝わってくる。

次のように、景と情が融合した歌もある。

朝霜を踏むよろこびと高ざらを飛ぶ雁が  
ねとよろこびいずれ

「これは眼前の景を見ながら、同時に自分の心の中をのぞき込んである歌である」さらに「意味付けの困難な日常の断片が集積したところに、一人一人の貴重な（生）が成り立ってゐるのだ」と示す。

注目した箇所を引いていると、先の「意味付けの困難な日常の断片」というところが、景を捉える上でたいへん重要であると思われる。言い換えれば、読者が景の中に感情的な意味をはっきり読み取れてしまうなら、即き過ぎということになるだろう。

次に、三井修『天使領』から、景と情の程よい距離を感じる歌を見たい。

あの橋をあの時渡っていたならば… 桜  
若葉の昼を膨らむ

長身を言われておりしは若き日のことな  
り 山茶花また紅く咲く

薄闇に躑躅の暗紅溶けきれず 人は未練  
を引き摺り止まぬ

作者は回想や、ある感慨に思いを馳せなが

ら、今、近くにある景を静かに見つめている。桜若葉の緑、山茶花の紅、躑躅の暗紅といった目前の色彩が、作者の遠くを思う心情に沁み込んで美しい。

榊原紘『Go』では、初句切れて景と情を組み合わせた歌が印象に残った。

冬銀河 胸からバツジ外しつづ信じてい  
ると言いたくて言う

雲ふる ずっと心に留めている地図があ  
るなら破ってみせて

雪解風 ひるむあなの手をとってそれ  
がとどめになるということ

冬銀河の冷たい輝きが、言いたくて言う言葉をするほどく照らす。雪がとけかけて雨にまじり降る雲と、心中の（とあるもの）を破ることの取り合わせである。三首ともに、唐突に置かれた初句が読者を揺すぶるような、または誰よりも揺さぶられている作者が見えるような歌である。

無限にひろがる空間と、たえまなく過ぎてゆく時間の中から、そのときそのとき、たった一つの景が切り取られて詠まれる。景と情のつながりの線に、その人だけの「生」を感じるような、かすかな詩的な謎が秘められている。そのような即かず離れずの歌に惹かれる。